

〈研究ノート〉

現代日本語の書きことばにおける重複表現の 冗長さと単調さに関する一考察 —逆接表現を例にして—

金 佳¹⁾ 田村 彩乃²⁾

要約

本研究では「テキスト性」を支える結束性に関わり、かつ形式上回避できない逆接表現を取り上げ、言葉の「機能」と「形式」という2つの観点から重複全般に関わる言語的要因を検討する。結果として、同じ機能の逆接においては、逆接表現の重複の「冗長さ」は結束性及び文章の展開と関わっており、また機能が異なり形式が同じであるときに、同じアクセントでどちらかが機能語である場合は重複による「単調さ」が見られる。重複全般において、「冗長さ」に関しては、それぞれの語の使い方や有標性によって異なるため、重複表現の反復距離ではなく、言葉自体の用法や有標性のほうがより重複に関連しており、「単調さ」はアクセントを含めた表現形式によるものであると考えられる。

キーワード 重複, 冗長さ, 単調さ, 逆接表現, テキスト性, 音韻形式

目次

1. 先行研究と研究目的
2. 分析方法
3. 分析と考察
4. まとめ

1. 先行研究と研究目的

反復法, 同語反復, 隔語句反復といったレトリック及び文章を結束させるための自然な「繰り返し語句」以外, 現代日本語の書きことばにおいて, 基本的には表現の重複が好ましくないと思われる。

これまでの先行研究によれば, その重複による文章の不自然さは大きく「冗長さ」と「単調さ」の二種類に分けられる。まず, 「冗長さ」において, 大塚 (1995) では, 中上級日本語学習者の作文における冗長さと談話主題省略との関連性を示しており, 李 (2007) では, 学習者は「繰り返し語句」の過剰使用から文脈の展開に影響をもたらし, 冗長なイメージを

1) 浦和大学 こども学部

2) ISI外語カレッジ

与えることを指摘している。内藤・小森（2016）は日本語学習者の作成したレポートに書かれていた重複表現を判定し、一部の文章の冗長性が読み手に稚拙な印象を与えてしまう恐れがあるとしている。その一方、「単調さ」においては、丸谷（1977）や河野他（1998）は、日本語の書きことばにおける文末の「～だ。～だ。～だ。」のような同じ音が続いた場合の単調さについて言及している。

上述のような重複が好まれない原因について、大塚（1995）及び内藤・小森（2016）は「テキスト性」を援用しながら内容に関わる語句を中心に分析を行い、そのうち、内藤・小森（2016）では、繰り返しの範囲と頻度を取り上げ、反復距離及び全体頻度と重複の関連性も示している。また、河野他（1998）では、文末表現の機能語の単調さは、述語の出現位置が固定されていること及び表現自体のバリエーションの少なさに起因すると述べている。

しかし、ことばの重複全般に目を向けると、先行研究によって示された重複の冗長さと関連するとされる反復距離と使用頻度は表現によって異なる場合がある。さらに、文における位置とバリエーションのみが単調に感じる原因であるとは言い難い。格助詞「が」を例にとると、文法的に正しく使われているのであれば、主語の直後にある「が」は文章全体で頻繁に現れたとしても母語話者にとって「冗長さ」あるいは「単調さ」を感じない部分であると思われる。

先行研究で述べられている冗長さの問題には表現の繰り返しの「形式面」に関わる単調さの問題が混合している。一方で、表現自体の単調さはテキストにおける論理関係及び表現自体の制約という「機能面」にも関わっている場合があると考えられる。従って、重複全般に関連する言語的要因を分析するには、冗長さと単調さの両者に関わっている表現への考察が望ましいと考えた。

そこで、本研究では「テキスト性」を支える結束性に関わり、かつ形式上回避することができない「逆接表現」を例として取り上げ、ことばの「機能」と「形式」から考察し、重複に関わる言語的要因を検討することを目的とする。

2. 分析方法

本研究は日本語における重複表現の言語的要因を検討するために、日本語母語話者の文章を操作して質的研究を行うこととする。その理由は以下の通りである。

まず、重複の「冗長さ」と「単調さ」が日本語のどのような要因と関わっているかを探っていくためである。柴田（2013）では、中国人学習者が日本語の作文を書くときに省略を用いないのは、中国語では代名詞主語を省略しないことに起因すると述べているが、本研究では学習者に見られるような他言語からの転移などの要因を研究対象としないため、日本語母語話者のデータをベースにしていく。一部のデータはNRI学生小論文コンテストの受賞作品から抜粋した文章である。

次に、それぞれの表現自体の用法、文脈の違い及び作文能力の個人差が想定されることがあり、母語話者の場合、ある程度表現の繰り返しを回避している可能性が高いことから、

コーパスなどによる量的な判断がしにくいと考えられるからである。

また、母語話者の重複問題は正文か非文かといった問題ではなく、重複を回避することによって文章がより自然になるという度合いの問題であるため、判定しにくく、また判断のゆれが出やすいことも考えられるからである。そのため、本研究では、関連する項目を8名の日本語母語話者に呈示し、その中で、より自然なものを選んでもらうという調査方法を用いた。

3. 分析と考察

表1 本研究の分析角度と考察対象

		考察対象	
		形式が同じ	形式が異なる
機能	形式		
	機能が同じ	重複①	重複①の解決策の1つ
機能が異なる		重複②	対象外

重複の一考察として、逆接表現の機能と形式のパターンを考えると、表1のようにまとめることができる。同じ形式の繰り返しであれば重複の諸問題が起こることをまず仮定した上で、「重複①」と「重複②」を考察対象とする。「重複①」は機能も形式も同じ語が使用される、即ち同じ逆接表現の繰り返しの場合である。それに対して、右側の同じ機能で異なる形式の表現を使用することによって重複の問題が解決できると考えられる。「重複②」は異なる機能で、同じ形式が使われる、つまり異なる語の繰り返しとなる。

まず先行研究に沿って、論点を検証したい。内藤・小森(2016)は主に内容に関わる表現の繰り返しを取り上げているが、帰結を表す「以上」で始まる接続表現の重複と結束性の関連性についても次のように言及している。「同一接続形式の繰り返しが『重複により、文と文の連結がスムーズに行われていない』という結束性に関わる重複の定義に当てはまる。(中略)読み手にわかるような接続表現の使い分けをする必要がある」。このことより「重複①」では、まず逆接表現を用いて内藤・小森(2016)の論点を検証する。そして、同じ逆接機能を持つ接続表現の中でも、それぞれの逆接の程度が異なることから、より逆接性の強い接続表現を使用することによって、構造的論理関係がより明確になると考えられる。以下の異なる逆接表現を使った例(2)は例(1)と比べ、論旨の展開が分かりやすいと評価されている。

(1) △¹ 今回の研修のプログラムには現地の高校生との交流が組まれていた。交流を翌日に控えたホテルで、私を含めて青森や神奈川から参加した4人は、意図的にその不安を口に出さずにいた。しかし、不安と緊張が入り混じった何とも言えない雰囲気の中にいた。まったく交流ができなかったらどうしよう、と思っていた。しかし、私たちのその不安は呆

気なく払拭された。彼らは伝統工芸である「中国結び」の作り方を熱心に教えてくれた。正直、それは難しく簡単にできるものではなかった。しかし、その高校生は英語とわずかな日本語を交えながら、丁寧に何度も教えてくれた。

(2) ○ 今回の研修のプログラムには現地の高校生との交流が組まれていた。交流を翌日に控えたホテルで、私を含めて青森や神奈川から参加した4人は、意図的にその不安を口に出さずにいたが、不安と緊張が入り混じった何とも言えない雰囲気の中にいた。まったく交流ができなかったらどうしよう、と思っていた。しかし、私たちのその不安は呆気なく払拭された。彼らは伝統工芸である「中国結び」の作り方を熱心に教えてくれた。正直、それは難しく簡単にできるものではなかったが、その高校生は英語とわずかな日本語を交えながら、丁寧に何度も教えてくれた。

例(1)と例(2)から、表現のバリエーションを増やすことは、単に重複を回避する働きだけでなく、文章の構造を明確にする効果もあり、書き手の意図をよりの確に表出することができると考えられる。このことにおいては、内藤・小森(2016)の論点を支持できる。

次に、逆接表現の使用制限から逆接表現と結束性について考察する。時枝(1954)では、接続詞は先行する思想を総括する機能が必要であるとしている。このことから、自然な書きことばの場合、逆接表現は「前件」と「後件」の両方もが必要だと考えられる。但し、一つ目の逆接の後件が二つ目の逆接の前件になると、不自然に評価されてしまう。

(3) △ 今回の研修のプログラムには現地の高校生との交流が組まれていた。交流を翌日に控えたホテルで、私を含めて青森や神奈川から参加した4人は、意図的にその不安を口に出さずにいた。しかし、不安と緊張が入り混じった何とも言えない雰囲気の中にいた。しかし、私たちのその不安は呆気なく払拭された。私たちを迎えてくれた美術コースで学ぶ高校生たちは、まるで同じクラスメートを案内する時のように自然に話しかけてきた。彼らは伝統工芸である「中国結び」の作り方を熱心に教えてくれた。

(4) ○ 今回の研修のプログラムには現地の高校生との交流が組まれていた。交流を翌日に控えたホテルで、私を含めて青森や神奈川から参加した4人は、意図的にその不安を口に出さずにいた。しかし、不安と緊張が入り混じった何とも言えない雰囲気の中にいた。まったく交流ができなかったらどうしよう、と思っていた。しかし、私たちのその不安は呆気なく払拭された。私たちを迎えてくれた美術コースで学ぶ高校生たちは、まるで同じクラスメートを案内する時のように自然に話しかけてきた。彼らは伝統工芸である「中国結び」の作り方を熱心に教えてくれた。

例(3)と例(4)のように、二重線の一文を挟むことによって、より自然になる。そのため、段落内で同じ逆接表現を2回以上用いる場合は、2語間の距離が問題となる可能性があり、二文以上が必要となる。そして、同じ表現を繰り返して使用する場合は用法自体に制

約を受けることがあると分かる。

だが、2つの「しかし」の間に二文以上が存在しても、例（5）のように何度も重複して使用することはできない。これは一つの意味段落では、逆接表現を多く使えば使うほど、論理性が弱くなる、もしくは主張したい箇所に読み手の焦点が当たらず、明確さに欠けることが原因だと思われる。

（5）△ もうすぐリオ五輪が開催される。日本でも選考が行われており、代表選手が続々と決まっている。彼らの活躍に日本中が期待に胸を膨らませている。そのような中で、今現在、ブラジルの現地ではジカ熱という感染症が流行している。世界の代表選手たちからは、心配の声が上がっている。[1] しかし、大会組織委員会は、冬場であるから問題がないと主張している。問題がないといっても、現地では、具体的にどのような対策を練っているのか分かっていない。実際に、保健機関からジカ熱に関する情報が一部上がっている。[2] しかし、それが本当に適切なものか疑問視されている。現状において発症を防ぐワクチンや特效薬がないため、世界の専門家たちは「科学史上前例のないほど人間の健康に害を及ぼすものだ」と警鐘を鳴らしている。こういった錯乱状態の中、ゴルフ界では辞退する選手が出てきていることも事実だ。世間からは出場を辞退することに対して批判や失望の声も出てきている。[3] しかし、五輪という夢の舞台へ立つことができる喜びと、選手生命を危険にさらす葛藤の中で決めた苦渋の決断であろう。出場する選手に関しては、たくさん情報が飛び交う中で、自分の身は自分で守るというように、選手たち自身で管理の徹底が望まれるところだ。選手だけでなく、応援しに行く選手の家族やファンにも危険は隣り合わせにある。[4] しかし、「選手たちの勇姿を直接見たい気持ちの方が勝る」という声も上がっている。現時点で5000人以上観戦するとの見込みだ。[5] しかし、リオへ行く人たちはジカ熱について忘れてはいけないことがある。蚊に刺されてジカ熱に感染しても、症状が出ないことや重症化しないことも多い。[6] しかし、その感染力は8週間続くとされている。日本に帰ってきたからといって安心して警戒を弱める人が多く出ると最悪の事態を招きかねない。五輪から帰国後も警戒し続ける必要がある。

さらに、内藤・小森（2016）では、繰り返しの範囲と頻度を取り上げて、反復距離及び全体頻度と重複の関連性について示している。しかし、同じ回数で繰り返された場合でも、表現によって自然さが異なる。例（6）と例（7）を比較すると、母語話者は例（7）のほうがより自然であると判断している。

（6）△ 上海に向かう機内の私は正直あまり気乗りしていなかった。初めて上海を訪れたのは2年前だった。近代的な上海の都市は眼を見張るものばかりだった。しかしながら ／だが、観光地をめぐる旅は、日本語が通じない不自由さと、文化や習慣の違いに戸惑い、帰ってきた私は疲労困憊だった。今年の3月、私は再度、上海を訪れる機会を得た。しかし

ながら／だが、前回の経験と近年の日中間の問題による不安も重なり、私の心は決して明るいものではなく、2年ぶりの近代的な空港の景色も私の心を弾ませてはくれなかった。

(7) ○ 上海に向かう機内の私は正直あまり気乗りしていなかった。初めて上海を訪れたのは2年前だった。近代的な上海の都市は眼を見張るものばかりだった。しかし、観光地をめぐる旅は、日本語が通じない不自由さと、文化や習慣の違いに戸惑い、帰ってきた私は疲労困憊だった。今年の3月、私は再度、上海を訪れる機会を得た。しかし、前回の経験と近年の日中間の問題による不安も重なり、私の心は決して明るいものではなく、2年ぶりの近代的な空港の景色も私の心を弾ませてはくれなかった。

例(6)と例(7)のように、同じ逆接の機能ではあるものの、「しかしながら」は「しかし」と比べ、繰り返して使用されにくい。例(8)と例(9)の接続助詞の例からも繰り返して使用されやすいものとそうでないものとがあると窺える。

(8) △ 上海に向かう機内の私は正直あまり気乗りしていなかった。初めて上海を訪れたのは2年前だった。近代的な上海の都市は眼を見張る光景ばかりだったものの／でありながらも／でありつつも、観光地をめぐる旅は、日本語が通じない不自由さと、文化や習慣の違いに戸惑い、帰ってきた私は疲労困憊だった。今年の3月、私は再度、上海を訪れる機会を得たものの／ながらも／つつも、前回の経験と近年の日中間の問題による不安も重なり、私の心は決して明るいものではなく、2年ぶりの近代的な空港の景色も私の心を弾ませてはくれなかった。

(9) ○ 上海に向かう機内の私は正直あまり気乗りしていなかった。初めて上海を訪れたのは2年前だった。近代的な上海の都市は眼を見張る光景ばかりだったが、観光地をめぐる旅は、日本語が通じない不自由さと、文化や習慣の違いに戸惑い、帰ってきた私は疲労困憊だった。今年の3月、私は再度、上海を訪れる機会を得たが、前回の経験と近年の日中間の問題による不安も重なり、私の心は決して明るいものではなく、2年ぶりの近代的な空港の景色も私の心を弾ませてはくれなかった。

以上の例(6)～例(9)から、同じ表現を何度も使えるかどうかは表現自体の有標性と連動していると考察できる。頻度を用いて有標性を定義する場合、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)における、接続詞の「しかし(68,212)」「だが(17,871)」「しかしながら(2,747)」と接続助詞の「が(395,958)」「ものの(5,228)」「ながらも(2,334)」「つつも(624)」の出現数から、接続詞の「しかし」と接続助詞の「が」がより無標であることがわかった。従って、有標性が強ければ強いほど、繰り返して使用しにくくなることが想定される。

上で述べたように、逆接表現自体の制限及び逆接表現の有標性によって、重複が許される回数が異なっている。指示詞のような他の機能の表現もそれぞれの許容の反復距離と使用頻

度が異なると考えられる。それゆえ、表現の距離と回数からは重複を考察し難い。

以上では、逆接表現のみの重複例を中心に、ことばの表現と表現自体の制約に関わる「重複①」について考察した。次に、逆接という機能から離れ、同じ形式が使われた場合の「重複②」における文章の自然さを見ていき、考察を行う。

(10) △ 新聞記事の抜粋だが、ブラジルではジカ熱が流行しているらしい。だが、大会組織委員会は、冬場であるから問題がないとしている。

(11) ○ 新聞記事の抜粋によれば、今現在、現地ではジカ熱が流行しているらしい。だが、大会組織委員会は、冬場であるから問題がないとしている。

例(10)と例(11)を比較した結果、例(11)のほうがより自然であると判断された。例(10)にある2つの「だが」は「前置き」と「逆接」という2つの異なる機能を持っているにもかかわらず、母語話者はより不自然であると判断している。また、例(12)のような形式が似ている2つの表現が入った文も母語話者評価が下がっている。

(12) △ 【それで；それ+で】それで、文章はそれでいいと思う。

一方、例(13)から例(16)のような、自然であると判断された文も存在する。

(13) ○ 【しか；しか】鹿しか来なかった。

(14) ○ 【から；から】明日から、空の部屋に置く家具を探そう。

(15) ○ 【しかし；しか】しかし、彼しか来なかった。

(16) ○ 【から；カラコン】目からカラコンを外す。

例(10)及び例(12)と、例(13)から例(16)までの自然な例を比較してみると、前後の言葉のアクセント²が異なることが分かる。上述の例の一部を再整理すると、以下のようになる。

(10) (再掲) △ 新聞記事の抜粋 [だ] が³、ブラジルではジカ熱が流行しているらしい。[だ] が、大会組織委員会は、冬場であるから問題がないとしている。

(12) (再掲) △ それで、文章はそれでいいと思う。

(13) (再掲) ○ し [か] [し] 来なかった。

(15) (再掲) ○ し [か] し、彼 [し] 来なかった。

例(10)(12)(13)(15)を再掲した。これらの例から分かるように、語形式が既出の機能語と同様である場合は自然度が落ちるが、アクセントが異なるのであれば、語形式が同じでも(類似していても)表現の自然度は落ちない。つまり、ことばの重複は形式によって単調な印象を与えており、その原因はアクセントを含めた語形式にあると考えられる。

さらに、内容語と内容語のパターンの場合はアクセントが同じにせよ、異なるにせよ、例(16)～例(19)は全て自然だと判断されている。

- (16) ○ [家] 事をしていたら [火] 事が起きた。
 (17) ○ 聴衆からお金を徴収する。
 (18) ○ その公開に [後] 悔した。
 (19) ○ [あ] きの食材にも飽 [き] が来た。

表2 アクセントの異同及び機能語・内容語の重複による「単調さ」

	機能語と機能語	機能語と内容語	内容語と内容語
アクセント同	△ <u>それで</u> , 文章は <u>それで</u> いいと思う。	△ <u>[た]</u> だ, それは <u>[た]</u> だでは入手できない。	○ <u>[家]</u> 事をしていたら <u>[火]</u> 事が起きた。
アクセント異	なし (○ <u>し</u> <u>[か]</u> し, 彼 <u>[し]</u> か来なかった。)	○ 地図の <u>[通]</u> りに, その <u>通</u> りを進んでください。	○ <u>[あ]</u> きの食材にも飽 <u>[き]</u> が来た。

表2のまとめから、同じ語形式のとき、同じアクセントで片方または両方が機能語である場合、重複による形式上の音韻的「単調さ」が生じることが確かめられた。但し、内容語はアクセントが同じ場合でも自然だと判断されている。内容語そのものが評価に関わっているのか、あるいは異なる表記のために弁別機能が働いて単調さが解消されたのか、評価基準について今後さらに検討する必要がある。

4. まとめ

以上を踏まえ、同じ逆接の機能において、逆接表現の重複の「冗長さ」は結束性、文章の展開、逆接表現の有標性と関わっていること、また、「単調さ」が判定される場合、機能が異なって形式が同じであるときに、同じアクセントでどちらが機能語であることがわかった。また、重複全般において、「冗長さ」では、それぞれの語の使い方や有標性によって異なるため、重複表現の反復距離ではなく、言葉自体の用法や有標性（頻度）のほうがより重複に関連しており、「単調さ」ではアクセントを含めた表現形式によるものであると考えられる。

註

- 1 記号は評価の結果を示している。○「より自然である」；△「自然でない」。8名の協力者による回答は全て一致していた。
- 2 ここで論じているアクセントは日本語音韻論的アクセントの概念ではなく、音声学的な音の高さによる前後の違いのことである。
- 3 アクセント核を置く箇所、あるいはより高く発音する音節に [] がつけてある。平板型の場合、記号は用いていない。

引用文献

- 大塚純子（1995）「談話主題省略と冗長さの減少について—中上級日本語学習者の場合」『国文』第83号、お茶の水女子大学国語国文学会、pp.22-33.
- 河野香織・黒澤義明・相沢輝昭（1998）「日本語文末表現の文体的単調さの解消」『言語処理学会第4回年次大会発表論文集』、言語処理学会、pp.438-441.
- 柴田奈津美（2013）「日中対照実験からみる代名詞主語とその省略」『言語情報科学』11、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、pp.37-53.
- 時枝誠記（1954）『日本文法 文語篇』岩波書店、pp.1-380.
- 内藤真理子・小森万里（2016）「アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策—卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析」『日本語教育』164号、日本語教育学会、pp.1-16.
- 丸谷オ一（1977）『文章読本』中央公論社、pp.1-317.
- 李宗禾（2007）「台湾の日本語学習者の意見文における語句の繰り返し形式—日本語母語話者との比較を通して」『台湾日本語文學報』22、台湾日本語文學會、pp.283-306.

調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）

Summary

A Study on Redundancy and Monotony of Overlapping
Expressions in Modern Japanese Writing
— With a Focus on Reverse Connection —

Jia Jin, Ayano Tamura

In this research, we deal with reverse expression that involved to cohesion to support “textuality” and cannot be avoided. We examine linguistic factors related to overlapping expressions in general from the two viewpoints of “function” and “form”. As a result, in the reverse function of the same function, the “redundancy” of the overlap is related to cohesion and logic of the text. When the functions are different and the form is the same, if the words are pronounced in same accent, and either of them is functional word, the problem of “monotony” will appear. We conclude in overlapping expressions that “redundancy” is depending on the usage and markedness (frequency) of the word, rather than the repetition distance of the overlapping expressions. On the other hand, “monotony” is considered to be in the form of expression including accent.

Keywords overlapping expressions, redundancy, monotony, reverse connection, textuality, phonological form

(2019年5月16日受領)